

## 聖霊降臨の主日

2012年5月27日

イエズス会助祭 小暮康久

今日、教会は聖霊降臨を祝っています。第一朗読の使徒言行録にもあるように、「一同が一つになって集まっている」ところに聖霊が降りました。それは『エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。ヨハネは水で洗礼を授けたが、あなたがたは間もなく聖霊による洗礼を授けられるからである。』（使徒 1:4-5）というイエス様の約束が現実となった瞬間でした。それはまた、『あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。』（使徒 1:8）という、「主の復活を証しする共同体」、つまり教会が生まれた瞬間でもありました。聖霊降臨によって始まった教会、その意味で今日は「教会の誕生日」と言えるかもしれません。

今日は、この「聖霊」についてご一緒に味わいたいと思います。新約聖書全体の中で、はっきりと「聖霊」という言葉が使われている箇所は約 90 か所あるのですが、そのうち 40 か所は今日の第一朗読で読まれた使徒言行録の中にあります。圧倒的な比率です。つまり初代教会の姿を描いた使徒言行録とは「聖霊によって、初代教会がどのように導かれていったのか」を記した書だと言えるでしょう。2000 年前の教会の誕生の瞬間から今日まで、教会に「活（はた）らき」かけ導いているのはこの「聖霊」です。

私たちが信じ、賛美し、礼拝する神は「父と子と聖霊」の三位一体の神です。確かにこの「三位一体」が、神学的考察の深まりを経て、教義として確定されたのは 4 世紀後半かもしれません。しかし、この「三位一体」の教義は決して人間の頭が作り出したものではありません。教義とは、それに先立つリアルな信仰の体験を後から「言葉」に整理したものです。教会が絶えず体験してきた生き生きとした神との交わり、そのリアルな信仰の体験こそが先にあるのです。その意味で、教会はその誕生の時から「父と子と聖霊」の神との交わりを信仰の中で体験してきたのだと言えるでしょう。それでは、初代教会やそれに続く教会は、どんなお方として「聖霊」を体験してきたのでしょうか…。新約聖書や教父たちの文章からは、教会が「聖霊」を「活（はた）らき」として体験してきたということが分かります。

「活（はた）らき」とはなんのでしょうか。私たちは「活（はた）らき」そのものを掴むことは出来ません。それそのものは姿・形を持たないからです。しかし、私たちは日常の経験の中で、「活（はた）らき」というものがあることを理解しています。では私たちはどのように「活（はた）らき」を経験しているのでしょうか。私たちは、物事に何らかの「変化」が起きた時に、その「変化」によって、そこに何らかの「活（はた）らき」があったと理解しているのです。

日常の経験の中の一つの例は、風の「活（はた）らき」です。風は目に見えませんが、例えば部屋の中にいて窓の外を見ただけでは、風が吹いているのかどうかは分かりません。しかし、外の木々の葉が激しく揺れていると、「ああ、つよい風が吹いているんだな」と分かります。木々の葉が揺れるという「変化」によって、そこに風が活（はた）らいていることを理解するのです。

風の「活（はた）らき」ということと言えば、新約聖書の中の「聖霊」の「霊」と訳されているギリ

シア語は、「 Pneuma πνεῦμα 」という言葉なのですが、元々は「動いている空気」という意味から来ています。ですから「 Pneuma πνεῦμα 」は元々「風」とか「息」と訳される言葉なのです。ヨハネ福音書3章のニコデモとの対話の中では、「霊」との関連でイエス様が「風は思いのままに吹く」(ヨハ3:8)と言われますが、この「風」は「 Pneuma πνεῦμα 」です。旧約聖書でも全く同じで、旧約聖書の中で「霊」と訳されているヘブライ語「ルーアッハ רוּחַ 」も、「風」とか「息」と訳される言葉です。

つまり、聖書の中では「風」も「息」も「霊」も、この「動き」つまり「活(はた)らき」によって物事に「変化」を引き起こすものという言う意味で一つの言葉なのです。「神の霊」は「神の息吹」であり、「風」のように思いのままに吹くものなのです。私たちはそれがどこから来てどこへ行くのかを知りえません。しかし、『あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。』とイエス様が言われるように、それは確かに私たちに「活(はた)らき」、私たちの中に「変化」を引き起こす力を持っているのです。

皆さんも御自身の信仰の歩みを振り返る時に、自分自身の中で何かが「変化」したと思えるような体験がこれまでにあったと思います。一人一人の体験の内容はそれぞれまったく違うかもしれませんが、しかし、それが神様とのより親しい交わりへと向かうような「変化」であったならば、そこに「聖霊」の「活(はた)らき」があったと言えるでしょう。自分のことを話すのは少し恥ずかしいのですが、今日は「証し」として、この聖霊の「活(はた)らき」についての私自身の体験を分かち合わせて頂きたいと思います。

私は大学生の時の成人洗礼です。社会に出る前の大学生という時期は、ある意味で自分自身の人生について初めて真剣に考える時期であるかも知れません。私はそうでした。そんな時、アウシュビッツで身代わりに死んだコルベ神父の話や遠藤周作さんか誰かの小説を偶然に読んで知りました。「どうしてこの人はこんなことが出来るのか」という衝撃と共に、その思いは心の深いところに突き刺さり、離れなくなってしまいました。上智大学には通っていましたが、キリスト教は自分の人生には何の関係もないうちでずっと思って過ごしていました。しかし、コルベ神父の身代わりの死という事実の前に、私の中で初めて、「人間にそんな生き方を可能にさせるキリスト教とは何なのか、そこに一体何が隠されているのか」という強い思いが湧きあがるようになりました。大学で教えていたある司祭に相談し、シスターを紹介され、一緒に聖書を少しずつ読み始めました。キリスト教に全く触れたことがなかった私にとって、初めは聖書の世界は全く異質なものに映りました。しかし、不思議なことにその違和感は少しずつ少なくなっていきました。『わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る。』(マタ 16:24-25) という箇所に出会った時、これは巷に溢れかえる御利益宗教とは全く違う、何かとんでもなく真剣なものだという思いと共に、「キリスト教は本物かもしれない」という思いが強まっていきました。半年ほど経った頃、「私も神を信じたい」とか「洗礼を受けたい」という思いが起り始めましたが、一方では「止めておいた方がいい。やはり私にはこんな生き方は出来ない。無理だ。止めよう」というもう一つの心の声もありました。

そんな二つの心の声の間で揺れ動いているような時期、夏休みでしたが、その司祭が同伴する黙想会に参加したのです。それは座禅の接心の形式でしたので、3日間の黙想会でしたが、朝から晩まで座禅三

味で、足は激痛で疲労困憊といった感じでした。黙想会で見えてきたものは、足の痛みに振り回されている自分の貧しい姿だけでした。「神を信じたい。聖書が言うように、自分を捨て、自分の十字架を背負って、キリストに従いたい。だけどやはり、自分にはそんな生き方は無理かもしれない。」とそんなことを感じながら黙想会を終えました。疲れた体で帰路の電車で揺られながら、車窓の外の景色をただぼんやりと眺めていました。そんな時です。それは何の前触れもなく一瞬のうちに起こったのです。うまく言葉に出来ませんが、自分の中心で、一瞬にして眩しい光が燃えあがるように放たれたのが分かったのです。もちろん物理的に外からも見えるような形で光ったというわけではありません。心に目があるのなら、その心の目がその光を見たという表現が一番近いような気がします。外的な時間から見たらそれは一秒にも満たない出来事だったはずですが。しかしその瞬間、私は神様が存在しておられること、この世界に神様の霊（聖霊）が満ちていること、聖書が真実であることを知った、いや、知らされたのです。何故、聖書が「アーメン、その通りです」と言っているのかが分かりました。「止めておいた方がいい。やはり私にはこんな生き方は出来ない。無理だ。止めよう」というもう一つの心の声は一瞬にして消し去られてしまったのです。その年のクリスマスに私は洗礼を受けました。

あれから20年近い歳月が流れていますが、このような体験はこの一度だけです。もちろんその間には、いろいろな迷いや困難や苦しみもありましたが、「神様が存在しておられる」ということについては、一度でも疑いが起こることはありませんでした。このような「変化」が、私自身で作りだせるものでないことは私自身が一番よく知っています。「やはり私にはこんな生き方は出来ない。無理だ。」と諦めかけ、この世に引き返そうと踵（きびす）を返しかけたその瞬間、聖霊が、私に、活（はた）らかれたのです。それは疑うことが出来ません。

私たちの毎日の生活の中で、どれほど聖霊が私たちを支え、導いて下さっているのかを思い味わう時、感謝の思いと共に、聖霊降臨は私たちの日常そのものであることに気づきます。聖霊の「活（はた）らき」、導きなしに、私たち信仰者の人生はありえないからです。聖霊は来て下さいます。神である聖霊に幼子のような全き信頼を持って、共に感謝と賛美を捧げてまいりましょう。

(3980字)